

ウイスコンシン大学における

浄土教ジョイント・セミナー

参加報告

宮下晴輝

米国のウイスコンシン大学は、仏教学の専攻のもと博士号を取得できる海外唯一の大学である。大谷大学は十数年来ウイスコンシン大学と学術交流をしてきたが、このたび「浄土教」というテーマでジョイントセミナーが開かれ、去る一月より半年間、真宗学専攻の安富信哉講師と仏教学専攻の私とが参加した。以下はその報告と並びに近年の浄土教研究についての感想である。

ウイスコンシン州の首都マディソンは、米国の中北部、シカゴの北西三百キロ、大農園地帯の只中にある静かな町である。私が家族とともにマディソンに着いたのは一月初旬であった。冬は、直降してくる北極の寒気で、マイナス十度前後の日が続き、時にマイナス三十度にもなる。ウイスコンシン大学の仏教科主任清田実教授の実に周到な御配慮に預り、到着当日より事

なく生活を始めることができたのは幸いだった。ただ驚いたことに、アパートにもち込まれた諸道具は、これまでにウイスコンシン大学で研究された日本の仏教学者の用いられたものとお聞きして身の縮む思いをした。つい先頃までは駒沢大学の袴谷教授が滞在されていたし、少し思い出して諸先輩の名を挙げるだけで、私のような若輩には身にあまる光栄と思われた。

八五年度の春学期は一月中旬より始まった。私たちの主目的は清田教授の担当になるセミナーにアドバイザーとして参加することであった。セミナーは、清田教授が用意された論文の各テーマをもとに討論していくことになっていた。その概要は以下の如くである。

Pure Land Buddhism :

The development of the theory of salvation through absolute

faith

I. Themes and Assumptions

1. Problematics: Origin and Development of the term "Pure Land"
2. The Buddha of Pure Land and Bodhisattva Dharmakara
3. Vow: The Switch from Karmic Transmigration to Transferring Merits
4. *Nembutsu*: Its Existential Meaning and Problematics
5. The Meaning of Faith: Belief in the "Incomprehensible"

II. Indian and Chinese Canonical Sources

1. The *Triple Sutra*: Its Literary History
2. Vasubandhu's *Upadesā*: The Practice of Purification
3. The Chinese Textual Development: The Three Streams of Pure Land Thought
4. Tan-tuan's *Lanchu*: *Jiriki* and *Tariki* Practices
5. Shan-tao's *Kuan-ching-su*: The Salvation of the "Wicked"

III. The Japanese Systematization

1. The Historical Background
2. Honen and His Thought
3. Life of Shinran
4. Shinran's *Kyō-gyō-shin-shō*: Salvation through Absolute Faith
5. Shinran's Concept of Salvation: *Shōjōin* Epilogue: An Interpretation of Pure Land Thought from a Mahāyāna Perspective

第一章の浄土教の主要な概念を論ずるだけで大半の時間を費した。その際最も腐心せざるを得なかったのが、どこから出発すべきか、であった。もちろん筋道としては、浄土教を仏教史の上的に確に位置づけることが課題である。「浄土とは何か」という問いを仏教史のどのような脈絡のもとに読み得るであろうか。近年話題になったポール・ハリソン教授の『般舟三昧経』を取り扱った論文を例にあげてみよう。ハリソン教授は『般舟

三昧経』の大乗仏教における位置を論ずるに際して次のような枠組から出発している。つまり、大乗仏教には二つの主要な流れがあると考えられている。一つは〈般若経〉(the Prajñāparimitā)の伝統、それは智慧による自己解放(self-emancipation through insight)、つまり極東における「禪」につながる伝統であり、他方は〈浄土教〉(the Pure Land)の伝統、それは仏陀の原理が人格化され、その恩寵と力を信ずることによって救済される(salvation by faith in the grace and power of certain personifications of the Buddha-principle)とする伝統である、と。そしてこの二つの伝統の間にあるならかの関係を示唆するものが『般舟三昧経』であることを論証しようとしている。ここに提示された枠組は一見してごく常識的なもののように思われる。決してハリソン教授の新しい見解ではない。むしろ却って日本の仏教学研究たちはもっと平然と、〈般若経〉の伝統は難行道自力であり、〈浄土教〉の伝統は易行道他力であり、恩寵による救済教であるともいう。ともあれハリソン教授の枠組の場合、「智慧による自己解放」が〈般若経〉の際立った特徴を果して示し得るのだろうか。というのは〈般若経〉総体が「智慧による自己解放」を目指すといえるのだから。また後者の〈浄土教〉を「恩寵」「力」という概念で理解する場合、十分な経典解釈をふまえた上で、しかもそれらの概念が厳密に定義された上でのごとでないならば、実に不用意な了解という譏りは免れない。さらには、その了解を前提に出発した論証にどれほどの信頼がおけるであろうか。他方、日本の研究者

たちのなかに見られる枠組にしても、〈浄土教〉の伝統教学上の用語を自分たちが使用している常識的な意味のもとに転用しふりわけたにすぎない。もしもこのような枠組で〈仏教史〉が構想されることになれば、經典の名と仏教用語の間を常識が走りぬけることになる。

幸いにも、ウィスコンシン大学のセミナーに参加した学生は決して「恩寵を信ずる救済教」などとして浄土教を見ようとはなかった。むしろそのような視点を拒絶して「浄土とは何か」と問いかけてきた。彼らの問いかげがそのまま私には「仏教とは何か」と聞こえた。彼らの「仏教」に対する関心の契機は、禅・チベット仏教等種々であったが、しかしそこには非常に素朴ではあっても「仏教」そのものを見定めようとする視点があつたように思う。なかには、バリー文献に記載されていないものは「仏教」に非ずとする強硬派もいたが、その姿勢は余程健康であつた。

ところで私自身は〈浄土教〉を問うときの脈絡として全大乘仏教の最もプリミティブな枠組を「菩薩の誓願」と「仏土」のもとに了解する。諸大乘經典は菩薩の誓願とそれにもとづく仏土とをその骨格とし、そのことを課題として、〈般若経〉ならば「般若波羅蜜」「回向」「空」等によって、〈無量寿経〉ならば「聞名」「称名」「念仏」等によって、それぞれの經典固有のテーマを表現している。これが私の脈絡の立て方であつた。しかしながら、「誓願」や「仏土」は一応の枠組であつて、そこから出発することができない。というのは、それらの言葉の意味が

もはや見失われてしまっているからである。「誓願」とか「仏土」という言葉によって意味されている事柄を一体どのようにたずねていけばいいのか。

従来、大乘仏教の課題は教義学上の言葉で「自利利他円満」であるといひならわされてきた。なぜそれが大乘の課題であるのか。大乘以前の仏教界は、自利のみを追求していたからである、と見るのはあまりにも短絡的である。釈尊の教言を伝える阿含・ニカーヤ、あるいはアビダルマが自利をしか説かず、大乘仏教にいたつてにわかにかに利他をもあわせ説くようになったなどと今日誰も考えはしない。あるいは釈尊の教言そのものには「自利利他」が含意されていたが、仏教の僧院化によって大衆と切り離されたアビダルマ仏教が展開し、それを批判するものとして大乘仏教が興起した、と考えるのもまことしやかである。こういう考え方は「大衆の側に立つ仏教」を漫然と思ひみているにすぎない。「大衆」とは誰のことか。「利他」とはどういう事柄であるのか。また、果して教団の形態によって仏教が大衆と分離したのだろうか。むしろ教言の意味が見失われるから教団と大衆が分離していくのではないのか。とすれば、いまわれわれが遭遇しているのと同じ事態——教言の意味の喪失——が当時起っていたのだとも考えられる。では、いかにして大乘仏教は、教言の意味を恢復していったのか。大乘仏教が全く新たな言葉、つまり「誓願」「仏土」を中心に据えて展開していった理由の一端はこの問いに答えることによってうかがい知ることができ。しかもこの問いは、われわれが今日遭遇している事態に

通底する。

私は「誓願」「仏土」という表現成立の起源を『仏伝』中の菩薩の誓願の中に見ていこうと思う。本生の菩薩としての釈尊が燃灯仏によって授記される物語はいくつかの型がある。その時の誓願は、教義上の言葉を用いれば、願作仏心と度衆生心とを表わすものである。『仏伝』によっては、願作仏心のみを表わしているものもある。『仏伝』そのものの編纂時期は、大乘が興起する時代と平行しているので、先後を論ずることはできないが、『仏伝』に限ってみると、願作仏心のみを表わす誓願から両契機を表わす誓願への展開をみてとることができる。この展開そのものは、大乘仏教の影響下の出来事であるにしても、『仏伝』編纂者たち自身の思索が生み出したものに違いない。大乘仏教を荷負う菩薩の誓願の要は、願作仏心と度衆生心の二契機に尽る。伝統教学が既に明らかにしてきたことである。従って『仏伝』編纂者たちの思索の跡を追うことは、大乘の菩薩の誓願の意味を明らかにすることにつながる。つまり、第一の契機である願作仏心が、第二の契機である度衆生心を必然的なものとして介在させるにいたったその過程こそが、大乘の菩薩の誓願・仏土が成立してくる過程なのであると考えられる。彼ら編纂者たちの思索のなかで、第一の契機の意味する事柄が徹底して問われたに違いない。即ち「仏に成る」ことそのことの意味が。ひいては、「ゴータマが仏陀に成った」という全仏教史の根幹である最初の事件の意義が徹底して問い直されたに違いない。大乘仏教が教言の意味を恢復し得た背景には、全仏教

史の最初の事件に対する問い直しがあったのだと私は考える。今日のわれわれもまた、この最初の事件の意義をわれわれ自身の表現のもとに見い出さない限り、教言はもはやわれわれに何も語りかけないであろう。

以上は私自身の視点あるいは脈絡の立て方であって、(浄土教)にかなり接近したところでの見方であるように思う。従って全く別の視界のなかでの脈絡の立て方があっていい筈である。ただ、どんな脈絡にせよ、それは試られるべきであるが、その脈絡を徹底して最後まで遡ってしまふべきである。そうすれば、先に言った最初の事件の意義という問題にまで行くであろう、というのが私の予想である。更に言えば、この脈絡を遡り切ったとき、われわれはいかなる者としてこの最初の事件の意義を問うのかという、いわば仏教学研究という限定のみに止り得ない問いを抱え込むことになる。研究上の出発点ではなく、われわれ自身の出発点がここにあると私は考えている。

以上は、ウィスコンシン大学でのセミナーに参加した際の私なりの視点であった。そのセミナーのために用意された清田先生の論文の中では、浄土教研究の問題点が主として平川彰教授や梶山雄一教授の業績によって論じられていた。このことはつまり、両教授の学説が最もよく浄土教研究の現況を呈していると考えられたからであろうし、ある意味で正当な見方であるとも思える。そこでこの例にならば、清田教授の論文とは別に私

なりの感想をこの二教授の学説について記すことにする。

まず平川教授の学説は、「極楽」はインド以来の伝統である淨仏国土思想としての「淨土」と区別され、それが「淨土」とみなされたのは中国仏教においてであった、とするものである。その最も大きな理由の一つは、「極楽」という言葉は「清淨」を含蓄しないということであり、更にまた、羅什によって「淨土」という用語が用いられ出したにもかかわらず、その羅什が『阿彌陀經』を訳した際、「極楽」を「淨土」と呼ばず、しかもそうみなしていなかった、ということにある。この平川教授の見解は十数年来のものであり、その都度の表現・論証に多少の相違はあるにしても大綱は以上の如くである。さらにごく最近の論文の中で、「阿彌陀仏の教理は『般若經』とは関係のない、むしろ疎遠な方面で興起したと考えられるのである。そして阿彌陀仏の教理が、大乘仏教に入ってきたとき、大乘仏教にふさわしい教理となるために、『般若經』の淨仏国土の教理や、六波羅蜜の教理を採り入れて、自ら大乘的に変身したのである」(傍点筆者)と記されている。

さて、〈無量壽經〉や〈般若經〉という代表的な大乘經典のそれぞれ眼目をどう読むかということは、經典研究のいのちであるといえる。〈無量壽經〉についていえば、私なりの大まかな視点は前述したが、その最もプリミティブな文脈・主題は、〈我が國に一切衆生が生まれ限り正覚を取らない〉という法藏菩薩の誓願とそれの成就というところにあるのはいうまでもない。この最もプリミティブな文脈をはなれてしまつては、

一体どこに〈阿彌陀仏の教理〉を読めばいいのだろうか。また〈極楽〉とは、仏土の名である。にもかかわらず、〈極楽〉という名だけが〈仏教〉という文脈から切り離されて読まれるならば、その起源は、他界觀念とか生天思想だとか、イランやエジプトの思想であるといった、まったくもっていわれのない文脈に投げ込まれることになるだろう。今日の淨土教研究の混沌の一端がここにある。また〈般若經〉を淨仏国土思想のもとに読むという点で異論はない。しかしその淨仏国土思想を「菩薩が菩提心を発し、六波羅蜜の修行をなして、仏国土を淨めること」であると了解するならば、これで〈般若經〉の主眼点を尽せるのだろうか。〈般若經〉の主眼点は、六波羅蜜の修行そのことにあるのではなく、むしろその修行が成立する根拠を「一切知者性への回向」をもって提示しているはずである。さらには、「小品」系の淨仏国土思想は後代の挿入とも記されておられるが、もしそうであるならば一体〈般若經〉は何を説く經典であったのだろうか。ともあれ、いかなる主題がいかなる文脈のもとに取り扱われているのかは、文獻研究にとって最重要課題と思われ。

つぎに梶山教授の学説を紹介しなければならぬ。それは「回向」の思想である。しかし教授が提示される興味深い個々の論点をここで検討することはできないので、〈般若經〉、〈無量壽經〉がどのような文脈の中で了解されているのかをみるだけにする。教授によれば、これらの經典は〈紀元前後のインド思想〉という非常に広い視野のもとにおかれる。業報輪廻の説

は、当時のインド社会に確固として定着していた。その業報からの解放ということが、当時のインド思想の基調であり、大乘仏教もヒンズー教もともにそれを課題にしていた。そしてその課題に応える思想が「回向の思想」である。「ヴィシュヌ神は信者の業を消し、あるいは神自身の功德を信者に回施する」。また、阿弥陀仏は「地獄に墮ちるより仕方のない悪人をも、自己の修行の功德を彼にめぐらして、極楽に往生させ、成仏させる」。このように「恩寵の宗教」として登場したものが阿弥陀仏を説く「無量寿経」であり、業報からの解放は阿弥陀仏の恩寵による。恩寵とは、仏教でいう回向のことである、と教授は了解される。他方、「般若経」では業報からの解放は、実はすでに、空の思想によって説かれており、回向の思想はこの空の思想なしには成立しない、とされる。従ってまた「無量寿経」(初期古訳の)の回向の思想も当然その背景に空の思想をもっているのである、と。

教授の視野は広く、経典を読む脈絡も想像を絶している。ただ残念に思うのは、「これ仏教に非ず」と指摘する視点が読者にまで見えてこないことである。また「業報からの解放」とか「回向の思想」というだけでは、大乘仏教の固有の課題を表わし得ないはずである。なぜなら教授によればヒンズー教もそうなのだから。結局は「空の思想」を大乘に通底するものとみなされていることになるのだろうか。ではそうだとすれば一体

何のための「回向の思想」であったのだろうか。当世の時代思潮とでも考えるべきなのだろうか。

以上、雑駁な感想を記したが、今回ウィスコンシン大学に半年にも亘る滞在の機会を与えて下さり、しかも諸先学の研究をあげつらう私ごときの言葉を黙って聞いて下った清田教授の御寛容をここに改めて感謝するものであります。

参照

平川 彰

「浄土教の問題点」『浄全月報』25、一九七二

「浄土教の用語について」『日仏年報』42、一九七七

「浄土教の成立の問題」『石田古稀 浄土教の研究』一九八二

「浄土思想の成立」『講座大乘仏教』5 一九八五

梶山雄一

『「やとり」と「廻向」』一九八三 講談社現代新書

Paul M. Harrison,

“Buddhism in the Pratyutpanna-buddha-samukhāvasthita-samādhī-sūtra”

Journal of Indian Philosophy (1978)